

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-7

初めのうちは真紀が言っていることがピンとこなかったので、「何のこと？」と横田は怪訝そうな顔で訊いた。

「この事です」と真紀は穏やかに言った。

「もちろん……。すべてが気に入っている。教えてくれたあなたに感謝している」

横田は女がいつもの感じに戻ってくれた様子に安心して、少し大げさに言った。

スプリッツァーを一口飲んだ真紀は、無言で横田の次の言葉を待っていた。

「今度、朝倉君を紹介するよ」と横田は、しいて話の接ぎ穂を見つけて言った。

ワゴンで運ばれてきたフランス料理のクロッシュ（ドーム型カバー）が取られオンテーブルされた。

ナイフ・フォークをスマートに使いこなし美しい食べ方をする男を目の端で見ていた真紀は、「グラスの赤でもどうですか？」と台本の台詞でも読むかのように言った。

「いや、いいんだ。このバーで、このタイミングで赤ワインなど頼んだりしたら、野暮天になってしまう」と首を振って返答した横田は、ナイフ・フォークを置いて、ジン・トニックのグラスに手をやった。

「あら、おっしゃる通りでした……」と真紀はにっこりして同意する。

「あなたも何か食べたか？」と横田は自分だけが空腹を満たしていることに、ばつが悪い思いを含めて言った。

「ありがとうございます。私はこれで充分です」と真紀は微笑んで、オールドインペリアルバーのオリジナルになる突き出しの柿ピーを指さした。

「今晚、店に連れて行ってもいいかな？」

料理を食べ終わった横田は、飲み物のお変わりを注文してから言った。

「どなたを？」

「朝倉君。……画商の朝倉君」

「いちいちお聞きになるなんて、どうかなさったんですか。予約なしで来られることもある方が」と真紀はからかい半分で言う。

「うーん。朝倉君とは仕事以外では、どうもね……。弱みも握られているし」

歯切れの悪い言い方をする横田には、彼なりの理由があった。

美術市場での彼の絵画価格は一号につき八万円だったので、A4用紙サイズを描けば三十二万円で売れたのだが、派手な暮らしぶりなのに寡作画家の横田は、当然ながら生活に窮することになる。